

P I a n

D o

S e e

「先生」と呼ばれて

朝日町教育委員会

教育長 永井孝之

ある日、研修会が終わり仲間数人と夕暮れ時を駅に向かって歩いていると、後方から「せんせい～」と若々しい声が聞こえてきました。私たちは、一斉に声の主の方を振り返りました。その振り返り方があまりにも皆同時でしたので思わず顔を見合わせて笑ってしまいました。なるほど私たちは皆「先生」なのです。私は、帰りの電車の中で先ほどの出来事を思い出しながら、これまで本当に「先生」と呼ばれるに値することをしてきたのだろうかと考えてしまいました。

かつて、私は剣道部の顧問をしていたことがあります。若い時は、中学生なんぞに負けるものかと自分の強さをアピールするが如く、激しく生徒にぶつかったものです。中学生と稽古をしても負けることはありませんでしたから、剣道の基本や形、体の動かし方や「道」にかかわる古来からの考え方など、生徒たちに真剣に教えていたものです。

ある年、足腰のバネや跳躍力に優れた部員が入部してきました。身体的な能力では私よりはるかに優っていたでしょうが、いかんせん中学生です。私はこの生徒に期待を寄せ、私の考える剣道の基本形や勝負のあやを教えました。しかし、いくら教えても生来の体の強さが邪魔をして私が考えるような剣道の形にはなりません。試合に出してもほとんど勝つことはありませんでした。ところが、私が根負けしてその生徒の形の修正をあきらめたころから、彼は持ち前のバネと練習量を生かして少しずつ勝つようになってきました。それでも私の理想とする形からはずいぶんかけ離れた剣道のまま中学校を卒業していきました。その後、「大学で活躍している」とか「彼を国体選手に」などという意外な噂を耳にするようになりましたが、彼に会ったり直接手合わせをしたりする機会はありませんでした。

数年後、道を歩いていたら「せんせい～」と声をかけられ、声の方を向くと、そこに久し振りに会う大人びた彼がいました。懐かしい会話の中で、思わず「ずいぶん強くなったようだなあ」と言うと、「『少しでも上を目指して丹念に続けること』を先生のように実践しているだけです」と言葉が返ってきました。それは私が忘れかけていたかつての信念です。当時、私は、私自身の昇段と質的な向上を目指して、部活動の指導においても自分自身の練習においても真剣に稽古を重ねていたことを思い出しました。

私たち「先生」として、自分の学んだことや身に付けたことを高い指導技術で児童・生徒を教えることは大切な仕事です。しかし、自分より優れているかもしれない可能性ある若者たちに私たちが真に伝えなければならないことは、今の自分の力を引き出し、より伸ばすための努力をすることの大切さを身をもって伝えることだと改めて思いました。私たちは、子どもと共に生活する中で、教師として、そして、人間として向上していてこそ「先生」と言えるのかもしれませんが。今「彼ともう一度勝負がしてみたい」と思っています。

